



新美南吉と詩

Nankichi × Step

南吉の詩は童話に勝るとも劣らず魅力的。地元を中心に活躍する現代の若手作家たちと詩をコラボレーションしていきます。

ひらがな幻想

伯母さんの家ではおおさわぎでした 前山から虎がくるといつていました みんな押入れのなかにはいつて小さくなっていました しまったといつてひとり井戸のふたをしめてきました しまったといつてだれかが竈のうえに蟬燭をたてました 前山の竹がさあさあ鳴るとみんなふるえました こうじんさまをだいにしないからだと伯母さんがいいました 来るだろうか虎はといいました 来るはずだきつと来るよといいました 縁つきのたゝみにぱつと陽がさしました 前山から虎が来ました 暴れまわつてみんなくつてしまつてあとに櫛を落いていきました



鎌田千春 イラストレーター

1993年三重県津市生まれ。色えんぴつと水彩絵の具とクーピーで描いています。好きな食べ物は豆腐です。
wwaannii0429@gmail.com

絵について

この詩の虎はなにをあらわしているのかなあとつて描きました。わたしは、南吉さんなのではないかと思ひました。虎はここにこの虎を描きたかったです。この絵は、ホットカーペットをつけて、あったかい部屋で描きました。ずっと座っていたので足がしびれていました。

新美南吉



にいみなんきち
(1913-1943)

大正2年7月30日、愛知県知多郡半田町(現・半田市)に生まれる。幼くして母を亡くし、養子に出されるなど寂しい子ども時代を送る。旧制半田中学校卒業後、「赤い鳥」入選を契機に北原白秋や巽聖歌の知遇を得る。昭和18年、結核のため29才で世を去る。

解説

それにしても不思議な作品である。詩は、「伯母さんの家ではおおさわぎでした」と、突然始まる。前山から虎が来る、というのだ。真つ暗な押入れに入り、息を潜めて虎が行き過ぎるのを待っている。押入れに入り小さくなっている人間は、滑稽であり、しまった、と思つて井戸のふたを閉め竈の上に蟬燭を立てている人間は、愛すべきだ、と思うのだが、自然の虎は、まったく容赦しない。いかに手を尽くしても、どうすることもできない自然や現実の底知れぬ非情

さと、そこに生きる人間の懸命な姿をほうふつとさせる一編になっている。「櫛を落いていきました」という、この予期せぬ結末が妙に余韻となつて心に残る作品である。

前新美南吉記念館館長

矢口 栄 さん

解説者

半田市、知多市、東浦町の小中学校勤務を経て'04年から'11年まで新美南吉記念館館長を務める。著書「南吉の詩が語る世界」(一粒社出版部)「子どもたちに贈りたい詩」(教育出版センター)「新しい詩の創作指導」(共著・明治図書)ほか。

おしらせ

生誕100年記念
新美南吉装丁展
16人のクリエイターが編む南吉童話

【期間】1月25日(土)~3月16日(日)

【場所】新美南吉記念館

絵本作家や装丁家として活躍しているイラストレーターとデザイナー16人が制作した、新美南吉10作品の挿絵・装画、装丁を展示。原画は水彩、版画、ペン画、鉛筆画、切り絵、和紙のちぎり絵など多彩だ。本展では「展示する本」をコンセプトにオリジナルジャバラ折本を手製本している。このほかペーパークラフト作品の展示もあり。